

第7章

第61回 日米学生会議概要

第61回日米学生会議テーマ

“Toward Global Awareness: Everyday Impact Through Interactive Empowerment”

「日常から世界、日米から地球へ～国際社会を見据えた対話と発信～」

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである。」1934年、満州事変を契機に悪化しつつあった日米関係を危惧した四名の日本人学生は、この理念を胸に抱き太平洋を渡った。これが日本初の国際学生交流プログラム、日米学生会議の幕開けである。創立以来、参加者たちは国際社会で起きている様々な問題に深い洞察を加えると共に、日米両国の学生間の相互理解を促進し、友情と信頼関係を醸成してきた。毎夏日米交互に開催される約1ヵ月間の会議は、すべて学生の手によって企画・運営されている。

第61回日米学生会議は「日常から世界、日米から地球へ～国際社会を見据えた対話と発信～」というテーマを掲げた。私たちはこのテーマに二つ意味を込めた。

20世紀における日本とアメリカの二国間関係を振り返れば、それは絶えず変化してきた。第二次世界大戦直後の米国による戦後統治、さらには安保闘争や貿易摩擦など幾多の困難を乗り越え、日米両国間の関係は「歴史上最も成熟した二国間関係」と表現されるまでに至った。しかし我々を取り巻く世界に目を向けると、テロリズムに代表される暴力の応酬、環境問題、経済、貧困、民族問題など、日米だけでは解決が困難な様々な課題が溢れている。また、中

国やインドなど新興国の発展に視線が集まる中、日米関係への関心は相対的に低下しつつある。こうした現代の世界情勢を踏まえた上で、21世紀における日米同盟の意義や国際社会における日米の役割を考察したいという思いが、「日米から地球へ」という言葉に込められている。

また、分科会では文化や言語の壁を乗り越えながら率直な議論を交わし、フォーラムやフィールドトリップではさまざまな人と出会い、学生としていかに社会に発信できるかを模索する機会がある。この過程で、参加者は自身の考え方や価値観の根幹を見つめ直すことができるであろう。参加者には、第61回日米学生会議を終えて、それぞれが学生としての日常生活に戻り、さらには社会に羽ばたく際に、会議で蓄積された経験を生かし、自らの周囲に影響を与え続けていくことが求められている。さまざまな場で「対話と発信」を繰り返していくことが、やがて世界の諸問題を解決する一助になるであろう。これが「日常から世界へ」という文言の目指すものである。

このような基本理念の下、本年度の日米学生会議は東京、函館、長野、京都の四都市を主要開催地とし、議論と交流を重ねる。私たちは、第61回を迎える当会議の歴史と、それを支えてきた多くの人々の思いを受けとめ、両国学生間の対話の充実を目指し、学生のメッセージを社会に投げかけていく。

主催

財団法人 国際教育振興会

開催期間

2009年7月28日～2009年8月21日

企画・運営

第61回日米学生会議実行委員会

開催地

東京

江戸開府から四百余年。1300万人近い人口を擁する巨大都市に成長した東京は日本の政治経済の中心であると同時に、常に最新の技術と文化の発信地であり続けてきた。世界各国の企業、公館、国際機関が集中しているところを見れば、東京が国際都市であることは一目瞭然である。同時に、浅草や上野など、日本の伝統文化が色濃く残る街もあれば、もはや世界共通語にもなっている、ファッション街の「HARAJUKU」や最新技術とオタク文化の聖地「AKIBA」もある。今や、どこへ行っても人種や国籍の多様性が見られるようになった東京。様々な文化や価値観が交錯するこの大都市から、第61回日米学生会議は国際社会を見据え、日米の学生による対話と発信を開始する。

函館

100万ドルの夜景に朝獲れイカ刺し。年間500万人を集める観光都市として、また日本有数の漁業都市として名を馳せている函館も、江戸鎖国期には松前藩による蝦夷地交易の拠点の一つにすぎなかった。しかし、今からちょうど150年前に日米修好通商条約が締結されると日本初の国際貿易港として開港され、洋館や教会を建築する中で外国文化をいち早く吸収していった。一方で、幕末動乱の舞台となった五稜郭も残っており、異国情緒溢れる街並みと日本の伝統的雰囲気と双方をあわせもつ函館は、日本の近代化とそれに密接に関わってきた日米両国の関係を捉えなおす最適な場と言える。それに留まらず、日米両国と国境を接するロシアを加えながら包括的に国際関係を、また、日本の漁業から世界の海洋資源を、アイヌ民族から世界の少数民族を、と日米の枠を出発点にしながら様々な社会問題を世界全体に敷衍して論じることを目指す。

長野

日本アルプス、八ヶ岳などの雄大な山々、松本城、善光寺といった多数の国宝、重要文化財が存在する長野には年間9000万人程の観光客が訪れ

る。暑い夏をさわやかに過ごせる避暑地、喧騒から離れて自然を謳歌する保養地などとしても名高い。しかしながら一方、少子高齢化、過疎化、大都市との格差など今日の地方が直面する課題も忘れてはならない。経済活性化に向けた高度技術産業促進、信州農業と魅力ある農村社会へのビジョンなど、地方県政の取り組みを知ることができる重要なサイトでもある。「ふるさと信州」の美しい風景と人々の暮らしを、ホームステイや地域住民の方々との積極的なコミュニケーションを通じて、都市では伝えきれない日本を体感したい。

京都

明治維新まで千年間、日本の都であった京都。足を踏み入れれば、その歴史を見守ってきた寺社仏閣の醸し出す雰囲気にもまれ、日本文化を肌で感じることができる。一方、多くの大学、ベンチャー企業、NGO、NPOが存在し、技術革新や市民活動の先端を担っている。また、京都議定書の採択に代表されるように多くの国際会議の開催地でもある。このように世界に開かれた都市として現在も発展を続ける原動力になっているのは、芸術や工芸などの成熟した伝統と新しい感性とが刺激し合う相乗効果であろう。私たちも、この都市、さらには国際社会を動かす新しい意見の一つとなることを目指して、第61回日米学生会議の1ヵ月にわたる議論の成果を発表する。

会議の過程

第60回日米学生会議の参加者から選出され、発足した実行委員会が、日本側の主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側はISC, Inc.の協力の下、本会議開催のための準備活動を行う。4月に参加者決定後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講演会や勉強会、合宿などの事前準備を行い、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36人、合計72名の学生が約1ヵ月に渡って共同生活を送る。本会議の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、そして様々な社会活動、終盤に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者は7つの分科会に別れ、第61回会議のテーマである「日常から世

第7章 第61回日米学生会議概要

界、日米から地球へ～国際社会を見据えた対話と発信～」の下、ディスカッションを行う。また、フィールドトリップでは、各自の視野を広げ、討論の充実を図る。さらに、本会議では議論に止まらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。また、フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会に向けて発信する。

本会議終了後には、参加者は会議の内容を報告書にまとめ、第61回日米学生会議の総括とする。各参加者は、本会議で得られた経験を胸に、社会へと巣立っていく。

会議中のプログラム

分科会

本会議においての活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方5名ずつの学生が、本会議期間中を通じて議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。なお、第61回会議における分科会は以下の通りである。

●地球市民教育

Educating a Global Citizenry: What is the ideal education for a globalizing society?

●国際開発と自立的発展～途上国と向き合う～

International Development: Searching For Real Solutions

●世界を動かす新興国～BRICsの台頭と日米～

Globalizing Economies: The Rise of BRICs in Relation to Japan and the US

●世界の食糧安全保障～生産、流通、消費の再構築～

Food Security and the Future Accessibility of Edible Commodities

●現代社会と健康

Modernized Technology and Health Issues

●環境と持続可能な発展

Environment and Sustainable Development

●公と私：公共の利益は個人の権利と両立

できるのか

Public Interest VS Individual Right

Field Trip

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO及び研究所などへの訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることができる貴重な機会であり、議論をより現実的視点から行うための礎とする。

Special Topics

限定された議題を扱う分科会とは異なり、参加者が個々の関心に沿った議題を自由に設定し、異なる視点からの議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見及び議題設定能力を養うと同時により広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想の獲得により、会議をより充実させることも求められる。

Conference Wide Discussion

分科会では扱わないテーマを対象とし、日米学生会議アラムナイや専門家をゲストスピーカーとして招き、第61回会議のテーマである「日常から世界、日米から地球へ」を掲げ、参加者の見識を広め、新たな課題や視点を発見することを目的とする。

Conference Wide Reflection

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、感動、喜びなど様々なことを自由に話し合う。自分の思いを全体に伝え、また他者と思いを共有することで、自己を振り返り、他の参加者との相互理解を促進することを目的とする。

Forum

各開催地のテーマに沿って随時行われる。第一線で活躍する専門家や有識者の講演、または学生を交えたパネルディスカッションなど、参加者に学術的経験を得てもらうことを目的とする。さらには、分科会の成果の発表を行い、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの視点を来場者と共有することによって、第61回日米学生会議の成果を社会に発信することも目的としている。